和光市環境づくり市民会議会報　2019年春季号（第15号）

令和元年　5月1日

皆で和光の緑を守りましょう！

和光市環境づくり市民会議
会長　峯岸正雄

和光市環境づくり市民会議はその役割・活動の一環として、毎年市の環境施策実施状況を点検し評価と提言を行っています。昨年秋平成２９年度分を対象にこれを実施、「重要な緑地や湧水が相次いで失われている昨今の危機的な状況を最も重視し、誠に遺憾ながら豊かな水と緑を守る市の環境基本計画の精神に反する事態が進行している。」と総合評価し、市民憲章の第１条「緑を守る」に相応しい対応策の立案と実行を市に改めて強く要請しました。

去る３月１９日に国土交通省より公表された今年１月１日時点の公示地価で和光市は県内市町村別地価上昇率トップ、この点からも市内の用地開発の凄まじさが窺われます。

和光市は武蔵野台地と荒川低地の接点に位置し、高さ約２５ｍの崖線が市内を縦断、多くの斜面林と湧水がカタクリ等の貴重な植生を育み、湧水を水源とする越戸川には無数のアユが群がり、川で遊ぶ子供達の姿は今や日常の光景です。

市内の斜面林や湧水地はほぼ個人の所有で、長期にわたる保全管理には公有地化が最適です。そのためには所有者の賛同・同意と、買取のための資金対策が不可欠です。市の厳しい財政状況の下その実現には市民の意思表示が極めて大切で、当会議は市民有志の参加を心待ちしています。何時でも参加可能です。手を携えてかけがえのない和光の緑を守りましょう。後の世代に守り伝えるべき大切なものを失う前に。

和光市市民環境部環境課
主幹兼課長補佐兼環境計画担当統括主査
加藤賢司

平成 31 年 4 月から環境課主幹兼課長補佐兼環境計画担当統括主査に就任した加藤と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成時代が幕を閉じ、この時代における市の環境行政としては、市の環境に関する基本的な事項を定めた「和光市環境条例」を平成 15 年 4 月に施行し、この条例に基づいて「和光市環境基本計画」を同年 5 月に策定し、その後、状況に応じて計画の見直しを行いながら環境施策の推進に努めてまいりました。

また、「和光市地球温暖化対策実行計画（区域施策編）」を平成 24 年 3 月に策定し、地球温暖化対策に努める外、「和光市空き缶等のポイ捨て及び飼い犬のふんの放置の防止に関する条例」を平成 14 年 4 月、「和光市路上喫煙の防止に関する条例」を平成 18 年 10 月に施行するなどにより、環境対策に努めてまいりました。

市民、事業者の皆様には、市の環境施策にご理解、ご協力をいただくとともに、環境の形成にご尽力いただき改めて感謝申し上げます。

令和時代を迎えましたが、良好な環境を形成し、環境負荷の少ない社会の構築を目指していく環境の基本的な考え方は続いていきます。

環境の形成には、市民、事業者の皆様の力が必要不可欠です。

市民、事業者の皆様には、今後も引き続き、環境の形成にご尽力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ありがとうの環

和光市環境づくり市民会議
副会長　芝　勝治

先日の読売新聞に「平成に入って伝統文化やマナーの無視横行が昭和以上に強くなった」との意見が投稿されていました。私もその通りだと思います。外国人観光客のマナー問題が指摘されていますが、その前に自分たちの行いを見直してはいかがでしょうか。

乗り物、エスカレーター、道路の乱横断やスマホの使い方、ごみ捨てから礼儀作法までマナーの悪さが非常に目立つように思います。私が気になるのは狭い道や歩道を走る自転車のマナーです。歩行者の脇をスピード出して通り過ぎるものや、前後から来た時に避けて譲っても“ありがとう”の一言もなく過ぎ去って行く人。またベルを鳴らして無言で通り過ぎるのは「ドケ！」と言われていることです。

年齢的には男女問わず、若い人に多く見受けられます。私の住むマンションでは遊歩道から歩道に出るのですが左右の見通しが悪く、昨年は３人が自転車と接触して怪我をしております。ルール上自転車は車道を走るのが原則です。

私はスポーツサイクルが好きで毎週１回くらい５０キロほど走っております。勿論安全走行です。やむを得ず歩道を走る場合はすぐに止まれる速度です。ある時私が歩いていて自転車に道を譲った際“ありがとう”と言われビックリしたと共に爽やかな感じを味わいました。

以前住んでいた地区では９０％位の人がありがとうと言ってくれましたが、和光市では非常に　少なく感じます。確率的には３％くらいでしょうか！どうか学校や家庭で道徳、マナーを勉強して“ありがとう”を言い合い、明るい“令和“　の新時代を迎えられる事を切に願っております。

身近な自然を残す方策「和光のトラスト」

NPO 法人 和光・緑と湧き水の会
代表　高橋絹世

昨年 11 月に「都市部に残されたオアシスを次世代へ」をテーマに環境セミナーを開くことが出来ました。ここ 1，2 年の間に和光市白子地区では開発により、カタクリ等の自生する斜面林が次々と失われ、危機感を感じています。

このような時期、「トトロの森」の活動で知られる（公財）トトロのふるさと基金専務理事の荻野豊先生にご講演をいただきました。自然環境を開発から守るにはみんなの力で「買い取ること」。「それを進めるために、個人や企業の募金をもとにして、行政や市民の協力を得て残すための土地の取得が必要である」とのお話でした。「そうして得られた土地を、美しい自然環境として保全する実績が市民から認められ、土地所有者からも感謝されているとのこと。継続して自然を保持することで、周囲からの信頼が生まれ、その信用こそが大切」との実績を踏まえたお話でした。和光市での「トラスト」を進める上での貴重なメッセージとなりました。

和光市環境づくり市民会議では、自然環境を残していく方策を常に考え、「トラスト制度」を進めていこうと話し合っています。市民会議は市民と行政とのパイプ役として、重要となっています。皆さん、関心を持って市民会議への参加、御協力をお願いいたします。

午王山の多様な価値

髙橋勝緒

午王山は和光市北部の荒川の低地に面した島状の台地です。台地上部には縄文から平安に至る色々な時代の遺跡が在り、特に、弥生時代の環濠集落が特徴的で、国史跡の指定を目指しているとのことです。

3月半、発掘を担当する前田氏に、台地下部の発掘で、十数万年前からの地層がよく見えるとのことで、見学させていただきました。標高約6 m付近に固まった砂質の地層が在り、その上約3 mに10～20万年前に海に堆積した粘土質の地層が見られました。さらにその上には礫層や関東ローム層の地層も見られるとのこと。そしてその上部に、環濠遺跡など、多様な時代の遺跡があり発掘が進んでいます。この地は数千年の長きにわたり人が住み、そして去り、また住んで今日に至っている素晴らしい土地といえるのでしょう。

故駒井氏（和光高校教諭）の説明では、台地の南側の関東ローム層の中には、約3万年前の鹿児島の姶良カルデラの巨大噴火の火山灰層が見られます。午王山は、和光の地が、氷河期や海水面上昇、噴火や地震などの影響を蓄えて今に至っていることを知る貴重な場所と考えられます。和光には、午王山以外にも縄文時代からの特徴的な遺跡が多く発掘されており、小河川沿いや湧水のある武蔵野台地末端部に人の住みやすい地があったことを示しています。午王山の史跡が、単に環濠遺跡や土器の文化財としてだけではなく、周囲と結びついた和光の自然と文化を知るためのユニークな史跡となることを期待しています。

城山ふれあいの森

須貝郁子

白子小学校の北側にある城山地域センターの、その南東側の斜面が「城山ふれあいの森」です。都市緑地法に則り和光市が地権者さんからお借りし設置している5箇所の市民緑地の1つで、平成20年4月から平成40年までお借りする契約です。散策路がありサツキが点在し、さんさんと陽射しの降り注ぐとてものどかな場所ですが、ちょっと奥まっているためか人の気配がありません。

市の許可をいただき、昨年10月に地域自治会の有志とチューリップなどの球根200株を植えました。寒かった今年の冬を乗り越えて、今、色とりどりのチューリップがひときわきれいに咲いています。活動を知って、ご近所の方からスノーボールもいただき白い花がきれいです。

まだ管理団体を組織してはいませんが、近くの障害児の学童クラブの皆さんも管理にお手伝いくださることになって、先日もみんなで訪れ、枯れた背の高い草を払い整備してくださいました。ツクシ、タンポポ、カラスノエンドウなど野草も盛んで、なんだかほっとする空間です。

地権者さんのご好意でお借りしている場所ですので、今後、この斜面が四季折々の花々で覆われ、地域の人々が集えるそんな「ふれあいの森」となってほしいと思っています。

高野山での地域活動を終えて

佐藤妙泉（横笛の会）

和光市の環境づくり推進活動に従事してから約15年、2016年3月30日に和光市を離れ、弘法大師の聖地である和歌山県の高野山に移住して、総務省が地方創生の一環で実施する地域活動に従事して3年。このたび2019年3月31日、3年間の任期を無事に終え、新しい道を歩きだしました。高野山で暮らすうち、いつしか真言僧侶としての修行を始めた私は、退任後も引き続きお山に住み、修行を続ける道を選びました。秋には伝法灌頂という、正式な僧籍を取得する予定です。48歳という節目の年に、この行事が予定されていることは身の引き締まる思いです。この後は、たとえば空き寺など住職がいなくなったお寺に入り、お寺を復興するしごとに挑戦することも可能になります。これからの社会で、たとえば「心の救済」活動の必要性は静かにさらに高まってくると思われます。

15年間の社会・地域活動の経験や人脈は、この後こそ生きてくると考え、今は前だけを見て修行にまい進する日々です。お寺をもつことはまだ先になりますが、自分のできる活動は今から少しずつ続けようと考え、「横笛の会」という布教伝道の会をつくりました。年会費三千円でどなたでもご入会いただけます。私を媒介として、弘法大師や高野山と繋がっていただきたいと思って設立しました。ご縁の深い和光市の皆さんとも引き続き何らかの形で繋がっていけたら嬉しいです。佐藤妙泉の今後の活動については、公式サイト「高野日記」でもお伝えしています。

自然に感謝する心

小林知輝（和光自然環境を守る会）

周知の事実、日本は自然災害が多い国だ。そして国土の六割が森林に覆われる自然豊かな国だ。今も首都直下地震に怯えている我々とは違い、欧米諸国ではあまり地震が起きない。2011年に起きたバージニア地震の時、NY市民は地震をテロによる攻撃だと勘違いしたそうだ。アメリカにはハリケーンが多いから自然災害が少ないというわけではなく、それに対する法整備に関しては世界をリードしている。しかし世界の0.3%の自然災害がある国「日本」には自然の恐ろしさを知っている面では及ばない。我々が早々に自然が人智で御しきれるものではないと諦めるのにも納得がいく。

自然は人智に御しきれるものではないのだが、自然災害が少なく豊かな自然に囲まれ、動植物が多く生息する環境なら、自然は大した驚異ではなく管理する事が出来るものだと考えてしまっても不思議ではないだろう。これは西洋の思想だ。我々東洋は違う。自然は人智で御しきれるものではなく恩恵を与えもするが災厄ももたらす事があると考える。西洋では上から、そして東洋では対等に本来ならば自然を見る。

今、我々はそれを忘れてはいないだろうか？先人の心を。日本人の心の拠り所である富士山は世界文化遺産だ。かのような美しい自然を携えながらも。我々がゴミを捨てているためだ。御しきれない自然を前に感謝と畏怖を抱く我々がゴミを捨てている。自然の、自然災害の恐ろしさは自然の恵みとは表裏一体。自然災害の恐ろしさを説く我々が取り戻さなくてはならないのは自然への感謝なのだろう。

和光の自然は‘想像以上

野口龍太（和光自然環境を守る会）

私の所属する和光自然環境を守る会では、お祭り等に際し、越戸川で捕れた生き物を展示する移動水族館を行っています。この移動水族館は地域の方々に高い関心を持って頂いていて、おかげさまで毎回多くの方が展示を見に来て下さります。その活動の中で、私は時々こういった言葉を耳にします。

「和光にも色んな生き物が棲んでいるんだ。」

おそらく、和光市のような都市を流れる川に魚がいるなんて想像がつかないと思います。また、大人の方ですと子供の頃の汚い川のイメージが先行してしまい、和光の川に生き物がいるはずないと思っている方も多いと思います。実際、私も和光自然環境を守る会での活動を開始するまで、和光市は豊かな自然とは程遠い街だと思っていました。

しかし、実際に和光の川を住処とする生き物はたくさんいて、今日ではアユやウナギといった魚たちまでもが遡上してきます。更に和光市の豊かな環境は水圏にとどまらず、ヒロハアマナやタマノカンアオイといった絶滅危惧種に指定されている植物が生育する森もあります。

私はこの事実を知って、ものすごい衝撃を受けました。それは和光の自然が想像以上のものだったからです。ただ、和光にはまだ地元の自然の豊かさを知らない方もいらっしゃると思います。だからこれからも和光での環境ボランティア活動を通して住民の方々と環境を通じたコミュニケーションをとり、より多くの方に和光の環境の豊かさを知ってもらいつつ、僕自身も和光の環境に対する理解を深めていきたいと思います。

活動に参加して１年、川から学んだ環境

松永健司　（和光自然環境を守る会）

毎月第一土曜日朝９時から越戸川での活動に参加しています。川の中、川沿いの遊歩道、公園のゴミ拾い。護岸の木の剪定や撤去が活動の基本です。年間を通しては地元の小学校との校外授業の協力、桜祭り、川祭り、近隣ボランティア団体との焼き芋大会やタケノコ掘り等々、地元住民や行政、近隣ボランティア団体や学校と多くの関わりを持っている事に毎回、新鮮な驚きと感動を覚えます。参加する人たち、子どもたちから活動するパワーを貰っています。始めて 20 年を超える活動の歴史を感じます。

私がこの川を知ったのは和光の下新倉から朝霞の根岸台へ引越しをしてきてからですが、5～6 年ほど前に健康の為に毎日の通勤を一駅歩こうと普段使っていた朝霞駅から和光駅にしました。すると川の水のきれいな事が目に止まりました。休日に軽いランニングで川沿いを下って行くと遊歩道が整備された風景が現れました。中流からは護岸に溶岩の石が張り付けられ、遊歩道が整備され、花壇もあり、とても明るく気持ちの良い私の休日のランニングコースになりました。

私は去年の秋から犬を飼い始め、川沿いの散歩が日課となっています。そして、毎日多くの人たちとすれ違います。愛犬との散歩の人、花壇の手入れをされている人、ランニングやウォーキング、通勤通学の人。川の周りにエネルギーが溢れていると感じます。川の中には魚が棲み、虫がいて、鳥が翔んでいる。川と人の関わり方は色々あると思います。私は居たい場所、行きたい場所、楽しい場所であって欲しいです。

世界的に環境問題に関心が高まっています。人類が誕生して数万年、この数十年で生物がすさまじい勢いで減ってきて環境が激

変しています。『里山』という文化があります。自然の一部を借りて生活する方法です。生活する場所を作り守る。土地に愛情を持って暮らす。誰の言葉かわかりませんが、『今の地球は未来の子どもたちから借りているものです。そのままの姿で未来の子どもたちに返しましょう』私も強く思います。今ある森や林、鳥や虫、魚や動物を未来の子どもたちに残してあげましょう。

埼玉県水辺再生事業１０周年に寄せて
和光自然環境を守る会
会長　峯岸正雄

４月２３日公益財団法人日本河川協会より令和元年河川功労者表彰（個人 56 名および４３団体）が発表されました。埼玉県から 3 年ぶりで、当会の表彰理由は「平成８年に設立以来、越戸川の清掃活動を 20 年以上にわたって継続するとともに、埼玉県の水辺再生事業等行政と連携した活動も展開するなど、河川の環境保全・美化活動に貢献された。」とのことです。
２０年余り前都市化に伴い汚染された越戸川に踏み入った先人の勇気とその後の地道な努力によって越戸川が一早く県の水辺再生事業の対象に選定され、今日の見違える青と緑の豊かな光景に変身しました。今や当会のスローガン「生き物と人と風景が溶け合う越戸川」が実現しつつあります。
越戸川を美しい川として持続させるためには、周辺環境、緑や湧水の維持が欠かせません。当会はこの面でこれまで通り各方面と連携して参ります。これまでの皆様のご協力にお礼申し上げると共に今後とも宜しくお願い致します。

温暖化対策の長期戦略
友國　洋

新聞報道によると政府はこのほど温暖化対策の長期戦略案をまとめ、6 月下旬のＧ２０サミットまでに決定するとのことです。ポイントは①再生可能エネルギーを主力電源とする。②CO2 を回収・貯蔵・再利用する技術を開発する。③水素の製造コストを 1/10 以下に低減する。
このうち CO2 再利用と水素製造コストの 1/10 化は画期的なことで、実現すれば現在の世界のエネルギー事情を変える効果を発揮すると期待されます。
このほか、森林の保全と活用を長期戦略として挙げるべきだと思います。天然資源が乏しい日本において森林は大きな資源であり、温暖化対策とともに防災、水資源確保、国土強靭化、地方創生の視点からも重要だと思うものです。

編集後記
新緑が美しい候となりました。今号はいつものメンバーに加えて朝霞の 3 人にお願いしました。小林、野口さんは、越戸川の川掃除に中学１年生の頃から参加して今春、大学に入学したところ、　松永さんはもと和光市民です。令和の始まりに新風を運んでくれました。
「環」が人の輪を大きくすることを願っています。（友國）

環境づくり市民会議にご関心の方は事務局にご連絡ください。
会議は毎月１回市役所で開催しています。
事務局
和光市市民環境部環境課
　ＴＥＬ　０４８－４２４－９１１８